

龍南古事記：追懷

著者	江口，俊博
雑誌名	龍南
巻	2 0 0
ページ	2 6 - 3 9
発行年	1926-12-25
その他の言語のタイトル	龍南古事記：追懷
URL	http://hdl.handle.net/2298/8898

龍南古事記

江口俊博

赤星陸治から龍南第九十七號を貰つた、今度貳百號に達した時記念號を發行する計劃らしいから創刊當時の雜誌部委員だつたヌシは何か感想を書かんかチュウ話である、今度が貳百號なら多分百號の時だつたかと思ふが何か一丁書けと編輯委員から言ひつかつて龍南會雜誌としては正に空前絶後であるべき『號外發行事件』を少し書いた緣故がある。それで今度も復たヒツ書くかと言ふ氣になつて改めて其龍南第九十七號を取上げて見た。先づ第一表紙からして垢抜けがして居る。これが一體吾々の手でやつて居つたアノ野暮な脛毛だらけの龍南會雜誌の子孫なのかナとツクヅク感心する。併し三十年も時代が違ふからこんなに見違へる程變るのが當り前だらう。アノ時分の表紙は秋月老先生に書いて戴いたのだつた。表紙をメクルと一九二六年と書いてある。成程隔世の感ありだ。目次を見ると純然たる文藝雜誌、中味を讀んで見ると流石に千九百二十六年と銘打つ丈あつて清新の氣横溢だ。吾々の時代の雜誌をこれに比すれば宛然若様と乞食程の違いがあると思ふ、即下に急に自分は一丁龍南古事記を書いて見やうと云ふ氣になつた、今在學の諸君には何だ詰らぬと思はれるかも知れぬけれどもれを讀む當年の野暮助達は、屹度破顔一笑すると思ふて古い日記杯の間から夢の様な材料を拾ひ拾ひ書いて見た。

僕は明治廿九年に熊本を去つて以來一度も顔出しをした事がないから、熊本が今如何の狀を爲して居るか更に分らぬ、けれども其頃熊本城の西南に突出した一丸があつた。吾々は古城古城と言つて居つた。其古城の眞中を略東西に截る空濠があつた。此空濠から北半分の一廓は當時師團長とか參謀長とか言つた様な連中の官舎になつて居たが其南半分で第五高等中學校は呱呱の聲を擧げたんである。此處は以前は縣廳であつた。洗馬の橋を西に渡つて取つきが郵便局、其前を稍斜めに北へ通ると隣りが縣

會議事堂其向ふの西角が熊本新聞社で其頃の熊本の文化機關は此處に集つて居たと言つてもいい場所だつた。其熊本新聞社から北へお城に乘込む處に橋があつて其橋を渡り切つた處が此古城の大手と言ふべき御門、此御門を通り抜けて眞直ぐに通る路の左が即ち校舎の所在地、路から少し西に引込んだ所に昔流の太女關があつた。此女關を上つて暗い部屋を突抜けた處が正廳と云ふ處なんだろ。學校一の大廣間と言つても五間に六間位の處だつた様に思ふ。何かの時は此處が片つけられて式場に當てられた。其南の方に東から突出して居た一棟が校長室事務室等であつた。此處の前が西南に折曲つた狭い前庭であつた。前庭は高さ四五間の石垣の上で石垣の下はお堀であつた、お堀には紅白の蓮が叢生して居つた。教場は大体女關の前から北へ走る昔のお長屋を改造した様なものを使つて居た。此處から路を隔てた向ふの空地が体操場であつた。此体操場の東南は同じ様な高さの石垣で洗馬川に臨んで洗馬川を越えて山崎練兵場(今は市街地になつて居るらしい)を俯瞰する位置にあつた。吾々は此体操場で日々太股に黒血の害る様な秋山式体操をさせられて居つたのである。秋山式と云ふ名があつたのではない。曹長上りの秋山先生と云ふ慄悍な顔をした体操の先生が居られて、其先生と少し優しい眼鏡をかけた前野先生と云ふ二人の先生から体操を教えられて居たのである。當時の校長野村彦四郎先生は余程体操に重きを置いて居られた方で体操の先生を重用して居られた爲秋山先生でも前野先生でも仲々羽振が好かつた。其秋山先生の体操振りといへば號令をかける時はその眞黒い顔に眉ジワ鼻ジワを飽迄寄せて如何にも熱心そうな發動令を下す人だつた、体操の時は其シワの外に一動一動に肩を飽迄持上げて股を叩く時には鐵板も碎くる様に叩かせられた。それで三四日すると誰れでも股がスクレテ而して鬱血しないものはなかつた。尤も此當時の吾々は頗る單純に出て居つたから斯様にすることの科學的の根據如何なんて事は夢にも考へないで其勇壯なのに無性に共鳴してしまつてイヤガル所の騒ぎではなく競ふて自分の股を虐けて愉快がつて居つたのである。殊に奇觀だつたのは呼唱止めをかけられると一齊にシュッと言はせられた事である。それを高等中學校のシュッ体操と言つて有名であつた。兵式の方の總大將には川上親賢と云ふ大尉が居られた。薩摩の人で方形の顔をした鰐口の嚴めしい軍人であつた。後備位の人だつたらしい。西南戦争に偵察に行つて西郷方に捕られてウント殴られた結果だとか、聞いたがイカリ肩で肩に直ぐ頭がくつ附てる様な状態であつた少し元氣よく教

練をやつて居ると大尉は大満足でモウヨカガ／＼と云ふて休ませて呉れるのだつた。しかも大尉が自ら號令をかけて生徒を操縦された事は一度も無かつた。僕が本校に入學したのは明治廿一年の春であつた。其時上級には少數の豫科二級（これが第一期生）と豫科三級と居つた。廿一年の四月に豫科の下に補充科が二ヶ年附設されてそれは中學校の一二年に該當するのだつた。從てこれは七年制度の中學であつた。僕の這入つたのは此補充科であつたから日本に於ける七年制の開山第一期生なのである。尤も僕は途中で二年道草を喰つたから九年かゝりて通過した譯になり從て基礎工事に念の入つて居る事僕の如きも珍しいと思ふ。乍併僕の實驗に徴すれば基礎工事にこんな念を入れるに及ばなかつた様に思ふ。其辭現在七年高等學校制に反對して八年制を唱道して居る所を以て見ればいくらか甲に似せて穴を掘て居るのかも知れぬ。實は此時分熊本縣立中學校が廢校になつたのである。

森文部大臣は此時分一縣一中學校主義であつたそうな。處が熊本には佐々友房と云ふ政治家を校長に戴いて居る私立濟々愛なるものがあつた。こんな立派な私立中學校があるのに縣立なんか入らんことだと大臣が言つたか如何か知らんが縣會議員の多數が佐々氏の率ゆる國權黨員であつたセゝか縣立中學校は只一と揉みに國權黨員によりて揉み潰されてしまつたのである。僕も實は此縣立中學校の生徒であつた。廢校されると同時に濟々愛へは無條件に收容して呉れると言う話であつたが子供心には何だか濟々愛は敵の片破れの様に思へた、何クソ濟々愛に入るものとツムジを曲げた。時も時高等中學校で補充科を置くと云ふ事になつたので踴躍して試験を受けた、旨い工合に這入れた。それで舊中學校の同窓が上下の級に澤山居るんで僕達は一尙新しい學校に入學した様な氣持はしない、初めから學校が我物の様な氣がしてならなかつた。それが隋性で後年迄ズツト學校を我物顔に振舞つたのだかも知れない、尤も今から考へると縣立中學校よりも濟々愛の方が先輩だつたのかも知れぬと云ふのは其頃の濟々愛出身の安達謙藏君は大臣になつて居るが、小橋一太君はまだ大臣格たるに過ぎないから。そんな事は如何でもいい々が此廿一年の九月に西村貞と云ふ先生が教頭になつて來られた、體操場の處に生徒を集めて挨拶をされたが自分は自宅では生徒に面會しないと宣言された。何か先生には意味があつたのかも知れないが當時の吾々は變な事を言う先生だナ吾々を敵視した様な事を言はれると、第一印象甚だ拙かつた。其辭其翌日健軍村に遠足に行つた歸るさ、水前寺に休憩した時に西村先生から生徒への近づきの

印にと言つてパン菓子見た様なのを三つ宛頒たれた處から見ると必しも生徒を疎外される積では無かつたやうにも思はれる。がヤハリ何處かに生徒とソリの合はない處があつたと見えて越えて廿三年一月三十日孝明天皇祭の日に生徒有志と申す條大多數の生徒が水前寺に會合し、懇親會と稱して竹輪酒で代る／＼西村先生排斥の演説をやつた。誰れか委員を立て、文部省に陳情にでも行くかと言つた様な相談があつた。けれども誰も行つたものは無かつた様に記憶する。今ならばこれが差詰め學校騒動ストライキと云ふものになつたに相違ないけれども、由來熊本は師を敬する念篤く容易に師に抗すると云ふ如き氣にならず、而して生徒の半分位は當時熊本人であつた高等中學校生徒はまだ／＼反抗缺席杯と云ふ様式を知らなかつたのであつた。學校の方も吞氣だつたのか此露堂々たる先生叱議の會合が一向問題にもされずに濟んでしまつた、藤本充安君なんかは此處は羅馬のセクレッドマウンテンだ杯と言つて僕達を昂奮させた。こんな不評判が原因であつたらうか西村先生は其後トウトウ去つてしまわれた。話が後戻りするが野村校長は丁度今我國でやつて居る教練振作の様な事を此頃己に實施して居られた。軍隊と聯絡が取つてあつて或數の軍馬が借り出され、上級生丈は山崎練兵場で馬術を練習して居つた様であつた、それから今謂う運動部の事を其頃体育會と言つて相當にやつたもんだ。最上級に大分の人で池田宇作サンと云ふ變人に近い熱心な世話人が居られた。頻りと世話して吾々を戶外遊戲(此頃は遊戲と言つて居た)に誘ひ込まれた。テニス、ベ이스ボール、クロツケー等をやり初めたのは此頃だつた。池田宇作サンは一口の飯を三十二嚙むと謂はれて居つた體育家だつたが卒業しない内に死んでしまわれた、それからアノ單調な雲に纏ゆる高千穂のと云ふ軍歌の練習を此頃盛んにやらせられた。先生は秋山先生であつた。

廿一年十月十日に入學式を舉行された、式場は前に一寸書いた大廣間、文部省から學務局専門課次長杉浦重剛先生が參列されて其頃有名になつた例の勉強しないで勉強しろと云ふ訓辭をされた。丁度此頃第五高等中學校管内の中學校長會が開催中であつたそうで皆參列された。佐々友房氏も濟々養長として參列し今は忘れたが何事か祝辭を寄せられた。

十一月三日に天長節の拜賀式本校に來て初めての拜賀式であつた。例の大廣間の正面に御眞影を掲げ兩側に職員侍立し生徒は二名宛拜賀に出た。其後で前庭でスルメと蜜柑をサカナに御神酒頂戴であつた。安住時太郎君が生徒總代かなんかで祝詞を朗讀

した、レバノン山の杉がドウトカ言つた文句を未だに覚えてる、此時分迄は公々然學校で酒を飲まして居たのである、遠足の歸り杯校門の處で大きな樽から杓で勝手に飲ませたもんだ、今は禁じてありながら禁ぜられて居らず以前は解放してあつた割にはダラシナク飲んで居なかつた様に思ふ。

此頃學校には學術競勵會其他の競勵會があつた、吾々の級には地圖を見て感ありと云ふ題が出されてそれを代表者が作つて出して優劣を争ふのであつた。尙機械体操、ベースボール(此頃はまだ野球と云ふ名はなかつた)綱引、フットボール、競走等の競勵會もあつた、これは長く續かずに廢つたけれど一時は皆が氣込んで仲々熱心になつたもんである、今日は對校競技が仲々盛んになつて内校競技の方は割合に振はないが此時分の種々の競勵會は扱ひ方によりては今日でも随分面白い働きをすると思ふ。

此時分に忘れてならぬ事は兎狩である。熊本は由來兎狩の國である、山に網を張つて勢子が兎や狐を追ひ出し此綱に引かけて捕獲する一種の演習である。これで士氣を振興し協同を教え規律に慣れさせたもんである、困苦缺乏に堪えると言う以上に寧難を求めて進んでこれに當ると云ふ一種の氣概は大抵此兎狩によりて訓練されたのである、後年兵式教練の監督に來た沼田大尉杯は熊本の士分でも屈指の剛の者であつたが十二才の時初めて兎狩に行き少し時間が早過ぎたから暫く焚火でもして一と眠りしやうかと年長者達が言つた時、霜柱の上に帶解いて裸で寢込んで一行から呆れられたと云ふ様な逸話は此兎狩の産物である、又或先輩は自ら進んで吾々の兎狩の先達に來られたが、辯當に八代メンツウを持つて來てそれにイヤと云ふ程麥飯を押つめてありお菜には生の鹽鰯が入れてあつたが其生鰯を頭からムシャ／＼啗つて『焼きますと胸が焦げます』と云つて時の青年達を凹ました様な事もあつた。こんな風で兎狩は從來熊本人の負けじ魂をドノ位鍛練したら分るもんでなかつた、それで此頃誰れが言ひ出したともなく本校でも体育會の一部に兎狩部を拵えやうぢやないかと云ふ議が起り先以て志沖者を募つた處が忽ちにして多數の賛同を得て体育會兎狩部なるものが直ぐ出来上つた、それを今度大々的にやらうと云ふことになつた、時は十二月十六日であつた、學校中の生徒を四組に分け午前二時に校門を出發し野出三ノ嶽に大兎狩を催したのである、此時御傭外人のイイバル、クラミミ、先生も第三組に附添ふて山へ行かれた。ドノ組も吾れ劣らじと競争的に奮勵し何れも八山か九山を狩つたんだが其獲物は一組

三頭二組二頭三組五頭四組が一番成績が悪くて僅かに一頭であつた。僕は四組に屬して居つた。是等の獲物は嶽村の本陣で早速矢開きをやつた。他縣の人間には今は矢開きと云ふ言葉は分らないかも知れないか獲物を屠つて兎汁をして喰ふことを矢開きと言つたものである。此時分の嶽村の村長さんは有名な山室宗意さん同じく第五出身で今三菱銀行の重役になつて居る山室宗文君は此人の子息である。吾々が此兎狩に乗込んだ時は宗文君は恐らく小學校に行くか行かんの頃だつたと思ふ、其後大小色々の催しで年々兎狩の二三回をやらない事はなかつた、一度城南の吉野地方へ有志三十人で兎狩に行つた時である、昔からの惡習慣で深夜路が暗いと兎狩連は通過する町の兩側から竹掃木を失敬してはタイマツの代りに使つた、此時杯はそれを必要に澤山掠奪をして殆んど沿道掃木曠しと云つた程に盗んでしまつた。其罰かなんか知らんが終日狩倉して壹頭も捕れず夕方悄々と迎町方面から學校に引揚げて來たら沿道兩側の家から掃木盗み一頭も獲物なしでイ、氣味だと大分惡罵を浴びせられて聊か辟易した様な事もあつた。兎狩部が段々發達してから後年には毎年一回宛は屹度東山の錦野地方に一泊がけの大兎狩をしたもんだ、此錦野の兎狩などは古い時代の第五の連中は忘れられない懐しい思出の一つである。錦野の豪家國武と云ふ人の内を本部に願つて五六軒の民家に分宿するのである。何だか富士の卷狩を偲ばせたもんである。

明治二十二年に龍南の新校舎に移轉した、此處で研志會雜誌と云ふものを創刊した、無論銘々の原稿を其儘綴つて回覽に供するのであつた。當時補充一級だつた僕やら中島元徳やら今文科大學の先生をして居る村川堅固杯が發起人だつた。今から考へて當時の上級生達が如何に雅量恒懷の長者であつたかを思ふて感嘆に堪えない、それは下級の名もない僕達が誰れに渡りをつけるでもなくツイした思ひつきでこんな企てをしたのに豫科三級豫科二級と云つた様な上級生達が何の拘泥もなく翕然として續々入會して呉れ忽ちに七八十人の同士を得た事であつた。當時僕等としてはまだ一瓢を携へて山登りをし日西山に曰つて驚いて歸路に就く程度の幼稚な文を書いて居つた頃に此研志會雜誌は眞先から豫科一級の白石鰈牛君と二級の安東俊明君とが男女同權論を闘はし初め三回にも亘つて火を吐く様な文章で應酬したのには吃驚した、當時の僕には男女同權論なんか何の話やら分らず教科書の何處に出て來る問題なのか、何だか幾何や代數物理生理杯に出て來る一種の理論を薄目を明けて聞ける位の氣持

で讀んで居つた。男女權論者だつた体格雄偉な白石鐵牛君は遂に業を煮やして背低くの安東君に向つて君は女性は兵役の義務が盡せないから同權たり得ないなんか威張るけれど君の如き一寸法師は到底兵役になんか就かれない、それでも男女同權ならずと言つて威張れた義理かいなんか辛辣につき込んだもんだ。日露戦争の頃仁川の領事をしてワリヤク、コレーツ問題で腕を揮ひ後奉天總領事で早死した藤本四郎君が、今の龍南校舎に移り立てに研志會誌上で『登驚くべからずや』と題して建築の各部分について色々品鑑し便所の費用何百圓坪當り何十圓單に吾々が小便をヒル丈の個處に此費用、此費用があらば正に中人一家の住家が出来る登に驚くべからずやと言つた様な一文は随分人目を聳動した名文だつた、此研志會雜誌が實は今の龍南の先祖なんである此の頃補充科に丙組と云ふのがあつた。丙組は仲々名士濟々で如何した工合か仲々旨く融和團結して居つた。今は如何なつたか知らんが永富恕平なんて言う人傑が居つた。これは何處へ押出しても必ず一方の旗頭になる資質の男だつたが人望家の杉村英夫世語人の野田淳造同行きの強い三隅棄藏杯が丙組に居つた、此連中が金蘭會なるものを組織し回覽雜誌を作つて居つた、野田と言ふ様な美術家を包含して居るもんだから金蘭會雜誌は表紙杯も仲々立派な繪が書いてある整つた雜誌だつた、僕等とは組は違うが此頃の學校はホントに融け合つて誰れも彼れも隔てのない仲が多く僕等も杉村、野田、三隅杯とは最も親密だつた、それで或時何の考へもなく金蘭會は丙組専門にして居けれど構はないぢやないか、オレ達も入れろよと持ち込んだ、金蘭會の方では聊か迷惑したかも知れないけれど、惡意な仲でスゲナク斷り切れなかつたと見える。客員と言つた様な形で吾々其他數人相率ゐて全蘭會員になつた。處が段々やつて居ると吾々は金蘭會中の異端たることを徐々に氣ついて來た、金蘭會は地方雜誌である、仲のいゝ丙組と云ふ同窓達の内輪の雜誌である。こんな内輪の人達の雜誌にあり勝ちな且つ其特色とも言ふべき御國自慢の調子が滿誌に濃厚に横溢して居る。僕には一寸肌に合はなかつたのである、回覽雜誌の常として何れも朱批を天なり余白なりに書くのであつた。それで僕の鼻につく様な文章にソロ／＼チク／＼皮肉な批評を書き出した。金蘭會員から見れば正に危險思想家であつたに違ない。彼等の間にボツ／＼苦情が出初めたらしい、僕等は構はず乘氣になつて段々露骨に惡罵を浴せ出した、彼等は遂に業を煮やして此の如くんば遂に金蘭會員の融和をも害する除名してしまへと言う譯になつたと見える、杉村だつたが野田だつた

が吾々の處に來てドウモ少し困るから君達は除名するぞと言ひ渡した、其餘名された中の中島村川等と相談してモット自由な公開的な部分的感情に拘えられない雜誌を作らうぢやないかと卒然として起つて全棲に同士を募つたのが研志會雜誌の起りである。村川は少しは雜誌經營の素質を持つて居た様だが僕や中島は丸で薪ザツボの様な人間だつたから雜誌の体裁なんかにかけては絶えて趣味も持たす才幹もなく只白紙に研志會雜誌と書く丈の能しか持合はせなかつた、だから金蘭會雜誌に比ぶれば實に素朴其者の様な雜誌だつた、其代り中味は實に自由奔放で天地の大を語り、國の興廢を語り、人間の尊貴を語ると言つた如何にも快活な伸々としたものであつたり。尤も僕達金蘭會から除名された連中は流石に小供で除名された事可なり小癪に障るので一二號はツケ／＼金蘭會に喧嘩を賣つた文章を書いた、處が豫料二級一級の達觀した人傑達が穩かに且キビ／＼と朱批で以て其不心得を諭して呉れるのであつた、が藤本四郎君は僕の文章の余白に江口君君はそんな小事に拘泥して居て如何するか、吾々は第五高等中學校を見て居なくちやならぬ、柳も日本を以て念と爲さなくちやならぬぢやないか、金蘭會は金蘭會であらしめよと云ふ意味の朱批を加えて呉れた、此朱批で僕も流石に心境パット開けて赤面し其後は絶えて金蘭會に敵意なんかを表しなかつた、或時數人の友人達が寄宿舎の北裏の芝生に寢轉んで話をして居た時に誰れか、撃劍會を起さうぢやないかと言ひ出した、ソウダ是非やらうと云ふので多少心得のある連中が撃劍道具を持寄つたら五六組出來た、それで折々戶外で稽古をしたものであつた、赤星陸治杯が其時の一番生えである、僕等は其時は多少の心得あるものゝ一人で赤星杯よりか聊かクロオト筋であつた、けれども僕は余り多方面に興味を持ち何でもかでもやり散らかして遂に只の一事も眞のクロオトになり得なかつた、赤星は其集中的本能で後に龍南會が組織され劍道部が出來た時委員になり神影流の和田先生に傾倒して一生懸命にやつた爲に卒業の頃は一廉の劍客になり今大阪取引所の理事長として居る林市藏君や法制局長官の山川端夫君、浦和に隱棲してゐる元知事の名尾良辰、大牟田市長の岩井敬太郎杯と雁行した遣ひ手になつて居つた、それが三襲に入つた後岩崎家の道場に於ける先達となり、中山先生や何かの懇ろな磨きにかゝつゝ余程腕も出來た様だし好きの道だもんだから其世話好きの本性と結合して西久保好道氏なんかを通して武徳會にも後援し、今では仲々日本劍道の擁護者になつてしまつて居る、日誌で見ると廿四年の五月二日撃劍會委員選舉には僕が當

選し且會計委員にされて居る。今から見ると呵々大笑の事件である、僕ら如何に八百屋で出しゃばりであつたかと云ふ事は後に嘉納校長の時代に龍南會が組織された時創立委員が選舉され創立委員互選で部屬を極めた時、何人も僕の本質をつき留め得ないで江口君はマア文人かと言つた一票の差で雜誌部委員に祭り込まれたので分る。それから遂に惡因縁で結局總務委員にハミ出される迄幾年の間か雜誌部に榮を喰つてしまつた、人の運命なんか分らんものである。此時若し劍道部委員にでも引込まれて居たら劍道も上手になり今頃は三菱の重役になつて丸の内飛鳥も落す勢で居るのかも分らぬ、其後のことは分らぬが僕等の時分總務委員をやつた人で出世しないで喰ふにも困つてゐるのは僕とツイ此程愛知五中の校長を卒業して詰らぬ顔して閑雲野鶴を友として居る大塚末雄の二人位のものだらう、諸君出世したい人は中學校長になつたら大變だよ。

此處に面白いエピソードがある、多分廿三年冬の錦野地方兎狩の折から話が胚胎したものだと思ふが十二月十日に惡太郎同志が何處で話し會ひをした事が薩摩の志途^{シツ}邁^{マイ}雄魂^{ユウコン}記を鰐刻しやうぢやないかと決意したものだ、趣旨が振つてゐる、『以て士氣を振興しやうぢやないか』と言うのである、それでそれ斗りで足りないとおつて雲井龍雄梅田雲濱賴三樹と云つ様な維新志士の慷慨詩歌を澤山卷末に附加し士氣と令名しやうと云ふのである、如何にも洒々したもので當時の先生今では東京郊外に私立濟美中學校を經營して居られる今井恒郎先生の處に押かけて題辭を書いて下さいとネダツタもんだ、單純無垢で日本中の人が皆龍陽董賢の談を解せられるものと獨り合點で持込んだのだが伊勢ッ子の今井先生にはドノ位不自然でオカンカツタカ分らぬ、太ッ腹の先生は微苦笑をされて結局『取意略文』と書いて下すつた、大喜びで今度は畫の先生の山崎先生に挿畫を二つ書いて貰つて同士を募り登録定費二十錢だつたと記憶するがそれを取本町の細流舎と云ふ印刷所に頼んで百余冊印刷して分配した、暫くは無事だつたが翌年正月廿六日の九州自由新聞に高等中學校に於ける志途邁雄魂記鰐刻事件と題して大分此難した記事掲載した、此の如き事を以て士氣となすは誤解も亦甚しと言つた様な事であつた、越えて廿八日熊本新聞も亦追撃を加へた、只同日の獨立新聞は何と思つたかそれが如何したと言つて九州自由新聞を反駁した、こんな問題になつて困る如何しませうかと今井先生に御相談に行つたが段々協議の結果余りやかましくならない中に明日の中に右の冊子を回収してしまつたらよかと云ふ事になつた、それ

で早速手分けをして回収して廻り外へ送つてしまつたと云ふ様なのを除いて七十三部丈回収した、此事件で如何に當時の人情が酒落であつたかを証明する事は、無論無償で取上げるんだのに七十三人の内誰れ一人イヤナ顔をしたものもなく世話人たる吾々を皮肉くる人もなく寧ろ飛んでもない世話で御氣の毒だねと言つた調子で未練もなく投出した態度である、我國もツイ其頃迄其位悠揚迫らない人間が住んで居たのである、今の世相と比へて感慨深からざるを得んです、此纏まつた七十三部の士氣を擔いで二月一日に三隅、杉村、中島元徳、澁谷爲太郎、新美吉清、高山仁吉及僕の七人が悔悟狀を添えて平山太郎校長の處にそれを持込んだのである、平山先生は誠に温和な理解のある先生であつたがこんな本を回収して來なくともよかつた、諸君がこんな事の非を完全に悔悟して呉れればそれでよかつた、悔悟の實狀を示して呉れればよかつたのである、諸君支那人が世界剽る處で排斥されて居る原因の一つが男色である事を君達は知つて居るか云ふ様な事を言つて説諭された、僕等は分つたか分らないか分らないで引下つてしまつた、僕等には病膏肓に入つてそんな話は人の噂の様にしか受取れなかつたのであつた、其後六月に平山校長が突然病歿せられ弔問の爲棺側で夜伽きをした時に床の違ひ柵の處に士氣の殘骸を認めて惜しい事をしたナと言つたものさへ居た、平山先生は六月九日に花岡山の三本松で全生徒參列して葬儀を行つた、其時黑板勝美君が嚴かな國文で弔辭を朗讀した事が今尙耳底に新である、平山校長が亡くなられてから當分校長を缺いで、十月十日の第一回開校記念會は櫻井數頭の司會で舉行した、處が一日置いて十二日に新校長嘉納治五郎先生が着任せられた、吾々は中門から表正門へかけ整列して先生の來着を歓迎した、先生はアノ横の方が廣い様な體格で鐵柄のコオモリ傘を引摺りく吾々の前を通過された、最近ロシヤから歸る路に船の上で大のロシヤ人をデツキの上にイヤと云ふ程投げつけてしかも頭を打たん様に手の腹で頭を支えられたと云ふ勇猛な校長だと云ふのでヘルン先生から九州シンプリシチーと呼ばれた吾々は夢中で歓迎し或人達は崇拜さへして居つたのである、先生着任間もなく生徒徒間に何となく瀟灑して居つた各部の統一談が眞ぐに頭を擡げた、体育會があり擊劍部があり研志會がありそれに兎狩部あり弓術部がありそれに嘉納先生を迎えた以上必然に柔道も初まる筈、これ等を各別箇の團體にして置くよりも統一されたる大組織の各部とすることが有益であり必要である、是非そんな風に仕向けやう、外の高等中學校には校友會チュウがある、我

第五高等中學校もこれにならつたら如何なものかと言うので校長の諒解の下に創立委員會を開いた、議はドンドン進んだ、藤本充安武藤虎太なんて人が先導者で色々骨を折られた、二三回の會合で會則も略出來上つたが會名についてはヤハリ校友會とつけるかと言つた様な氣持も相應にあつた、處が嘉納先生が校友會杯と云ふありふれた而して内容のない特質のない様な會名はいかん、英國のオックスフォールドやケンブリッヅ杯ではこれ／＼で學校よりも寧ろ其會同窓會見た様な其會が有力である學校教育の方針や世話の燒き方杯其會が貢獻すること甚だ大である、吾々が今組織せんとする會も其位の抱負と意氣となくちやいかんから校友會や學友會はよせ、何か何年経つても人の飽きない地名でも取つては如何だと云ふお話だつた、それではそれもいゝでしやうと云ふ譯で色々名の相談をした、白川の北だから白陽會龍田山の南だから龍陽會は如何と云ふ話になつた、ドウモ白川の北と言うよりも龍田山の南と云ふ方に動きなき味がある、其方がよかる、併し龍陽は困る、龍陽董賢と謂つた様な感じがし現に男色の本場の一に數へられてる熊本の會に龍陽會と命名すれば動もすれば滑稽を感じてしまふ、それよりも一ツ陰だの陽だの言はないうで率直に龍田山の南と云ふ氣で龍南の方が朴實でよくはないか、龍陽と云ふ頭で考へると龍南は語調が悪い様だが五年六年の後は寧ろ龍南の方がいや味がよくて宜いぢやないかと言ふ人があつて一同早速それに決定した、それで會長には歴代の校長を推戴し各部の部長には先生方を委員は會員の選舉によることにし第一回は創立委員の選舉できめる事にした、僕は『寧ろ文人ならん』で雜誌部に抛り込まれたのが此時であつた、十一月三日天長節の嘉辰に發會式を行つたのである。

尙最後に是非語らなくちやならぬことは行軍である、此行軍に於て本校の精神が發揮され同時に長養された事は決して少くなかつた、ソウシテ當時の吾々が如何に此年々の行軍を待ち焦れたかも今の樂み多い文化青年達の夢想も出來ない事と思ふ、第一回の行軍と云つたら三角行軍であつたと思ふ初めて本校の宿泊旅行に行つた僕には實に魂が急に目を醒ました感じがした、三角港の清い海水其海岸に於て發見する種々の動植物、植物と思つて採つた一物がノソ／＼歩き出した杯何とも言へない智識の目醒めを感じた、十幾艘かの小舟を従へて港内を悠遊し前田元敏と云ふ先生が岩石の説明をされサレドストン／＼と教えられ雨ですネ風ですネ霜ですネと其腐蝕崩壊を説明されたことを思ひ起すと今尙昨の如しである其前田先生が小舟で追ひ廻して遂に小鷹の

一羽を鐵砲で打ち落された光景杯僕等には何と云ふ活々した面白さであつたら、其次に忘るべからざる行軍は久留米福岡地方の旅行である、當時の民度及物價の如何を想像し易からしむる爲めに今の生徒諸君にお話する、廿三年十一月六日から同十五日迄十日間の修學旅行に學校に納入する旅費が壹圓五十錢であつたが僕の日誌を見ると旅費が壹圓五十錢かゝると聊か當惑した様な記事がある、今では全く一日分の旅費で場合によりては一日分にも足りない程のもの、日本は進んだと言ふべきか開けたと言ふべきか僕等には今の日本の物價は余りと言へば余りでこれは是非共まだ／＼ズツト低落しなくちや駄目だと云ふ様な氣持が經濟學の學理を離れて強く働くのは全くこんな生活の體驗があるからである、今東京に居る知人の子供達がジンバリストが來たの何とか來たのと言つて八圓拾圓の木戸錢を惜氣もなく拂つて帝劇あたりに音樂を聞きに行くのが只々勿體なくて身が縮む様な氣がするのは單に僕自身が生計困難なから計りでは決して無い、マアソナナ講釋をする積りで書き出したのでは無かつたが旅費高を書いて見て不圖言つてしまつた、此福岡行軍で今の教育界にはトテモ見られない男性的の師弟の折衝があつた、そうしてそんな事が第五高等中學校文化の下積になつて居ると思ふから此龍南古事記には是非紹介して置かなくちやならぬと思ふ、それは六日初日は陸軍の演習參觀の都合で僅かな距離の植木に宿泊した、翌日は山鹿に宿泊して小倉の長谷川旅團と熊本の乃木旅團との對抗演習を觀戰する計劃であつたのである、然る處山鹿に到着して見た處が戰況の工合で山鹿の町は乃木旅團に占領されて宿泊は許されないと云ふ騒ぎ、それでお湯に這入つたりなんかして一とつ切り大休憩をした後遂に山鹿町から十數町許りの村落に急に頼んで宿泊することになつたのである、ソウシテ其村落に入り込んだのは稍日西山に傾いた頃であつた、村落の農家へ頼んで十人二十人と分宿した譯なんだ、村落である上に宿屋ではない素人屋へ突然の投宿而して物質は軍隊の入り込みで殆んど拂底と言つた狀況なんだから食事なんぞ右から左りと間に合ふ譯がない併し其處が青年で其處が學生の吾氣さでそんな事杯絶えて考へもしない、自分の腹の空いた時分には當然御飯が出来て來べきものだと極め込んで居る、處が自分斗り極め込んで見ても御飯は根から出來そうな様子もない、六時になる七時になる、一日歩いて腹はベコ／＼だが仲々御飯にありつけそうにない焼け腹で買ひ喰ひと思つても十余町の山鹿へ行かなくちや菓子屋なんかありやせん、且又十余町買ひに行く程の勤勉家は居ない、アツチでもコツ

チでも不平勃々である、其内に何處から傳はつたか本部の先生達はモウ何か喰つて居ると言う情報が來た、ヒドイぢやないか吾々を抛つて置いてどろろ風にけしきバムものも居た、其内に本部の方に當つてワアワアと云ふ突喊の聲が上つた、何だ見て來いと云ふて足早の男を走らせると間もなく歸つて來た、某は快活に笑つてアレハネ第一小隊が本部へ突喊したんだよ、銳劍突喊なんだ本部では先生少達斗り飯を喫つたと聞いて憤慨して最上級の連中で組織されて居る第一小隊が突喊して詰問したんだ何某先生が右の手に薩摩芋のフカシタのを振廻して銃劍の先に立ち塞がり誤解しちやいけぬ誤解しちやいけぬ吾々も御飯にありつけないうでペコペコで居る、それを見兼ねて此處のお神サンが僅か斗り芋をフカシテ贈られたんだ、喰つてゐるのは此芋だ、引き取れとやつたそうだが、そこで一小隊の猛者共も笑ひながら引上げたと言ふ話だつた、それは面白かつたと皆笑つたが僕等が夕飯にありつたのは確か八時か八時半分だつた様だ、翌朝は此附近で衝突があると云ふので朝早く出發して戰場に行く手筈だつた、處が昨日のフテ寢で第一小隊は整列に來ない、下級は早く出發しろとセガム、第一小隊は置てきボリも出來ず幹部は余程困つてモ少し待てモ少し待てとやつてゐる内に拂曉の霧をつんざいて大砲が鳴り出した、パチパチと小銃が鳴る、若い者の血潮はタギツテジツトシテ居られない、大きな校旗を先頭に押立て、算を亂して戦地へ押寄る、秋山先生聲を鳴らして制止するけれども凡て蟻の様にゾロゾロ行く、困り抜いて居る處に第一小隊確か武藤虎太君が小隊長の様だつたがニヤリと笑つてやつと整列處に來た、と思ふとモウ演習は濟んでしまつてアツチにもコツチにも打方止めの喇叭が劉亮として鳴り響く、旅團對抗にしては恐ろしいお手輕なものと思つて居たら後で聞くとき長谷川少將も乃木少將も聞えた猛將兩方夜半に部隊を出して敵線を窺かに突破して出來る丈猛進させて置いて戦鬪開始と共に一氣に敵の主力を撃破する手筈だつたのだそうだが、處が暗に紛れての動作双方いつの間にか入れ亂れて今曉戦鬪を開始して見たら敵味方背合せで向ふ向ひて射撃して居る様な奇現象を現出し戦争にならず打方止めになつたんだと云ふ、吾々は折角演習見る積で早起きをしたのに引率者のヘマで遂に間に合はなかつたマダエと云つた様なダ、をコネル、秋山將軍も困り返つて居つたらう校長が色々慰諭して兎に角行け行けと云ふ譯で今夜の泊りの兼松に向つて出立した、僕が今の教育界には見出せない氣分と云ふのは銃劍突貫と此演習見とである、生徒も直情勁行思ふ様な仕打をし

先生達も何等の介意なく何等の技巧もなく露堂々に眞情を披瀝して折衝し、事分れば一笑に附し絶えて滓渣を残さず、處分するの反抗するのと言つた様な愛憎さが一つも無い處誠に男らしくて今考へても胸がすき／＼する、畢竟平山校長と幹事の椿先生の局量が大きかつたセイだと今に敬服し懐しんで居る次第である。

目を睨ぶれば龍田山の松樹と大津馬場の杉の並木がアリ／＼と目に映る、煉瓦の正門がら背の低い中門迄の蜿々たる道がハツキリ見える、僕は幾度此門を出入した事だらう、中門の正面に植えてあつた蘇鐵の群落がドンナに繁茂して居る事だらう、イヤ吾々が跨いて歩いたアノ小さい松苗が今ドンナ高さになつて居る事だらう、嗚呼瑞邦館と云ひ寄宿舎と云ひ何とも堪え難い憧れを感じる、今にして振り返つて見て第五高等学校の良い學校は何處にもあるまいと思ふ、學問は出来なかつたかも知れない、大學者と云ふ程の大學者もまだ出て居ない大政治家と云ふ大政治家も出て居ない、吃驚する程の金を拵えた才覺者も居ないが僕等の在學當時程人心一和し素朴で開けつ放して上級下級の下らない隔て杯のない伸々とした暮しい學校はなかつたと思ふ二十餘年の校長生活ドウカしてアノ味の一片でも出したいと努力したが只一度稍アレに似た風味を出し得た切りで事々心に違ひ懊惱した日の方が遙かに多かつた、僕も決して只過去をのみ追慕する頑冥者流とは思はないが、アノ時代の學生氣質はドウ考へても實に清純だつた、今に於ても龍南の舊友相會うて破顔一笑する時程天地の寛きを感じる時は無い人生の豊かさを思ふ時はない、歴史でも何でも古に復れ／＼とよく言はれてる、今の第五が如何の狀であるか僕は全く知らん、吾々の思ひ及ばない新生面を拓いて雍々として相和して居られるのかも知らぬ、併し第五の歴史に於けるこんな古典が或は諸君が新文明を建設される力の一つとして何物かを暗示しないとも限らぬと思ふて長々と書いて見た、五十余年生きて見た僕輩には人生最も貴いものはヤハリ人間だと思ふ、人間の眞情の流露する人を自分の周圍に多く持ち得る人が眞に至幸の人と言へる、學生の間に一人もこんな人を持ち得なかつた人は惡らく一生逐々營々として喧嘩腰で暮す外ないだらう、僕はアラユル事に失敗した人間と思つて居るが、第五高等学校に學んだ事は完全な成功だつたと思つて居る。